

# オックスフォードだより(2)

愛知学院大学助教授 引田 弘道

## 長い夏休み

長い夏休みは余程効率よく過ぎないと、全く何をしていたのか分からないまま、ずるずると無為に日が経ってしまいます。休みが終わった後で一体何をしたのか振り返っても、何も具體的な成果がないことがよくあります。

それでも日本の大学は大体二ヶ月間ですの  
で、私の場合、一ヶ月間は事務やレジャー等で

消えることを覚悟し、残りの一ヶ月を有効に過ごすことができました。私が勤務している大学の宗教学科共同研究室には広い会議用のテーブルがありますので、誰も来ないのいいことに、毎日わが物顔でそれを専用しておりました。クローラーの利いた中でコーヒーを飲み、誰に気兼ねすることなく煙草をふかしながら贅沢極まりない勉強をしていたわけです。

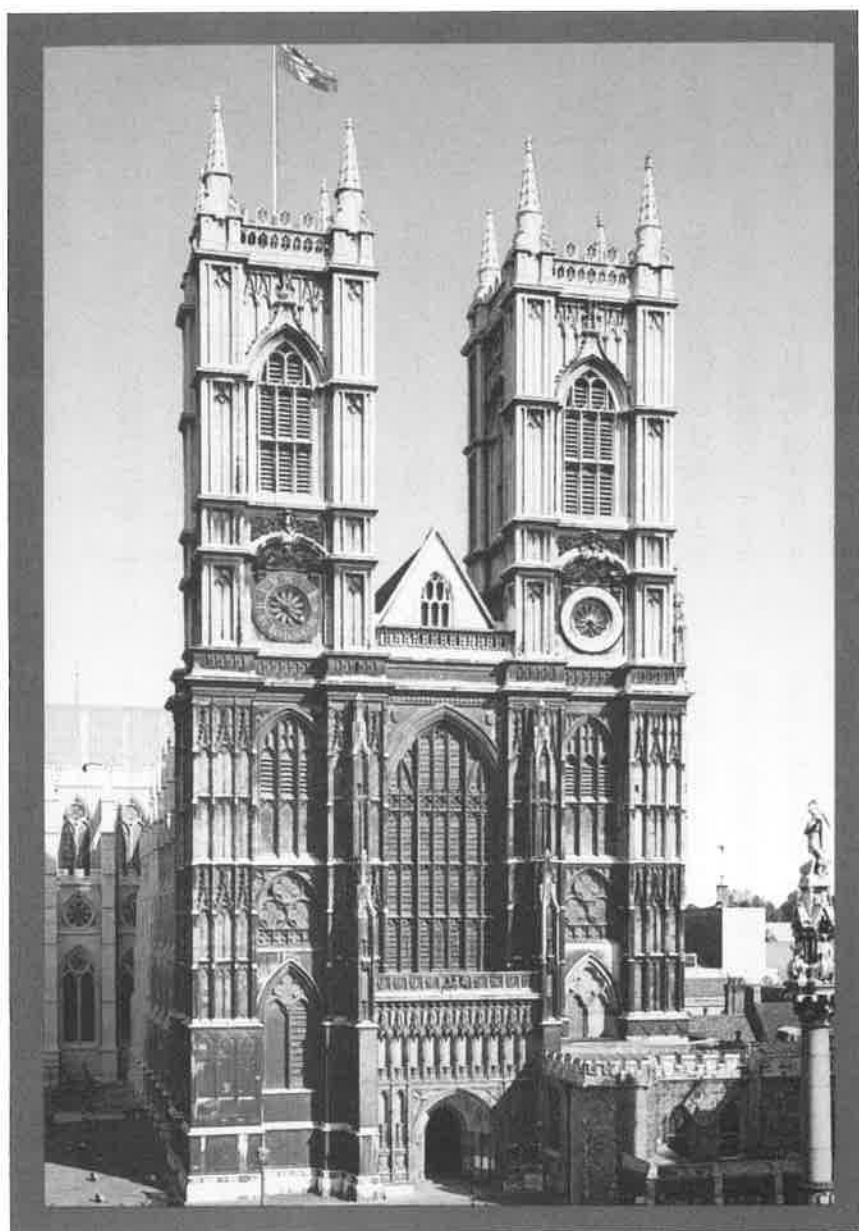
ところがこちらでは、日本と少し事情が違い

ます。まず夏休みが六月中旬から十月上旬まであり、信じられないくらい長期であります。こちらの大学は一年が三学期に分かれており、秋から新学期が始まるという形になっています。日本の大学だと、四月から始まる学期は前期・後期の二学期に分かれているのが普通です。この三学期はそれぞれに次のような名前がついております。

Michaelmas 学期：10月9日から12月3日まで  
Hilary 学期：……1月15日から3月11日まで  
Trinity 学期：……4月23日から6月17日まで

期間は一応一九八九年のものですので、年によって少し変動がありますが、おおむね一学期は八週間だと考えればよいでしょう。各学期の間が休みである訳ですが、冬や春の休みに比べて、夏休みが如何に長いか明らかであります。

こんなに長い休みですから、効率よく計画をたてないと毎日が日曜日になってしまいます。それにこちらではクーラーの利いたような部屋はどこにもありません。今年は異常気象でこちらの夏も猛暑であり、日中はあまりの陽射しの強さに外出するのが億劫になるくらいですが、本来は涼しくよく小雨が降るそうです。ですからどこに行っても、デパートでもレストランでも全くクーラーはありません。車にさえクーラーはついていないのです。クーラーもなく、自分専用の部屋も持てない状況では、図書館に通うことだけが唯一残された勉強手段となったのです。ちょうど私の住居から歩いて三十分くらいのところに大学の図書館がありますので、毎朝九時には自宅を出てここで勉強することが日課となりました。



## ボドリアン図書館

この図書館は旧館のビルと両脇の Radcliffe Camera、Clarendon (ラッドクリフ) カメラクラレンドン) ビル、それに道向かいの新館を合わせて、Bodleian(ボドリアン) Library と呼ばれています。ロンドンの大英図書館の次に大きく、一六〇二年、トーマス・ボドレー卿によって設立されたこの図書館は、五〇〇万冊以上の書籍を持ち、世界でも屈指のものと言えましよう、

これだけ古い図書館ですから、そこには貴重な書籍や写本が無数保管されています。ですから盗難には異常なまでに神経を使います。まず入館用の身分証を持ってないと館内には入れません。カレッジに付属している図書館や、オリエンタル・インスティテュート付属の図書館がオープンであり誰でも閲覧できると対照的で

す。この身分証を取得するには、私が確かにカレッジに所属している研究者であることを証明する Wolfson (ウォルフソン) カレッジの学長 Hoffenberg (フォッヘンバーグ) 先生のサイン入りの推薦状が必要でした。こうして手間暇かけて私の顔写真とサイン入りの身分証が出来上がるわけです。しかも、これを取得するさい、この図書館の書籍等を害わず、盗まず、煙草も館内で絶対に吸わない等の次のような宣誓文を声高に読み上げさせられました。

"I hereby undertake not to remove from the Library, or to mark, deface, or injure in any way, any volume, document, or other object belonging to it or in its custody; not to bring into the Library or kindle therein any fire or flame, and not to smoke in the Library; and I promise to obey all the rules of the Library".

このような宣誓文を、仏教の受戒のように、読み上げさせられたわけです。仏教の戒律ではこのように師の前で誓いの表明をすると、戒の本質である「防非止悪」の力が具わるとされていますが、まさに同じ考えがこの図書館にも適用されているのです。

### インディアン・インスティテュート

この図書館の新館の最上階には、インド学・仏教学関係の書籍がひとまとめにされているコーナーがあります。ここは特に「Indian Institute (インディアン・インスティテュート)」という名を持つ所で、数多くの貴重な文献が、およそ八万冊以上の開架図書として閲覧に供されています。今まで日本ではなかなか見ることの出来なかった、一八〇〇年代の研究書やインドで出版されたサンسكريットテキストが整然と陳列されており、インド学を研究する者にとって

は誠に極楽のような場所であります。

ここでの本はゆっくりと手にとってながめながら、「これがあの有名な本か」といちいち感心して、二時間ほど経つと図書館の外に出て、近くの King's Arms (キングズ・アームズ) という有名なパブでコーヒーを飲みながら一人悦に入っておりますが、これらの本をよく見てみると、館外借り出しの可能な Indian Institute のスタンプのあるものと、借り出し不可能な Bodleian Library のスタンプのあるものとの二種類に分かれているのです。どうしてこのような区別が同じ図書館の中であるのか、一体インディアン・インスティテュートとはどのような性格のものなのか、探偵になった気分です。あちこちをれとなく尋ねてきました。

運よくこの図書館員であった Jonathan Katz (ジョンナサンキャッツ) 氏の手になる「The Indian Institute, Oxford, and its Bod-

「Jan hosts」というレポートを入手にすることが出来、このインスティテュートの歴史と図書館との関係が明らかになったのです。

このインスティテュートは一八八〇年代の初期、当時オックスフォード大学、サンスクリット学の教授であった。M・モニエル・ウイリアムズ卿によって創立されました。本拠地であるインスティテュートの建物は、図書館、講義室、読書室、インドの美術品とその展示室、さらには談話室までも備えた立派なものでした。図書は主として創立者のM・モニエル・ウイリアムズ卿やS・C・マラン博士の個人的な蔵書の寄贈を核とし、インド本国の研究や個人的資産家からの寄贈により逐次その数を増やしていったようであります。またカシュミールの王統史を描いた Rajatarangini の校訂者で有名な、A・シュタイン卿がカシュミールで収集したサンスクリット写本のコレクションもまた貴重な

資料となったことは言うまでもありません。

このインドとイギリスの友好のかけ橋として当初絶大な賞賛をもって誕生したこのインスティテュートも、不幸なことに、その当初の目的を十分に達成しないまま、短期間の後にその活動に終わりを告げなければならなくなったのです。総合的な文化センターの解体は次のような経過で行われました。

- (1) インドの美術品は同じくオックスフォード市内の Ashmolean Museum (アシュモールン) や Pitt Rivers Museum (ピットリヴァーズ) にそれぞれ移管されました。
- (2) サンスクリット学等の講義は大戦後のインド独立、そして大学のオリエンタル学研究所である Oriental Institute (オリエンタルインスティテュート) の設立後には、ここですべて行われるようになりました。
- (3) 図書は、一九二七年にはボドリアン図書館に

所屬していましたが、一九六〇年代までは未だこのビルに所蔵されてはいたものの、その後現在の場所に移管されました。

このように戦後間もなくしてインド独立により、イギリスの植民地支配の終焉と呼応するかの如く、このインスティテュートはその機能を完全に停止したのであります。このインスティテュートがインド本国の資産家からの個人的寄贈を主たる財源として運営されていたのですから、この結末は当然のことであつたのかもしれませんが、学問という名の高潔な存在は、孤高な花ではなく、経済という人間どうしのどろどろとした関係である水面下の泥の中に根を張りながらも、それに汚されることのない美しい蓮華のようなものであることを、今さらながら痛感いたしました。

現在、このインディアン・インスティテュートの建物は創立時と同じ場所である、ボドリア



ン図書館、旧館の Catte Street を隔てた向かいにあります。

図書がすべて移管された後、この建物は大学事務局として使用されておりましたが、一九七〇年代の初めの学生紛争の頃、ここに学生に関する秘密調査が保管されているとして一部の学生に占拠されて以来、ここは大学の現代史部門の研究所及び図書館(Faculty of Modern History and its Library)として使用されています。今ではほとんど誰も気にもとめない、このインディアン・インステイチュートの建物もこのようなインドとイギリスの友好の象徴としての歴史があつたのです。今では、この建物の入口のロビーの壁に掛けられている木枠の銅板に刻み込まれたサンスクリットの文と、その下の小さな真鍮板に刻まれた英訳文にしか、往時の様子を窺い得ることが出来ません。そのサンスクリット語でしたためられた四つの偈文は次の

ような内容となっています。

(1)この建物は東方学を研究するアーリア人(インド人とイギリス人)の便宜に供する為に設立されたこと。

(2)除幕式はインド女帝の皇子 Albert Edward 自身の手により行われたこと。

(3)記念碑は西暦一八八三年5月2日の水曜日、インド暦では一九三九年ヴァイシャーク月(10月から11月)の月の欠ける半月の10日の水曜日に据え付けられたこと。

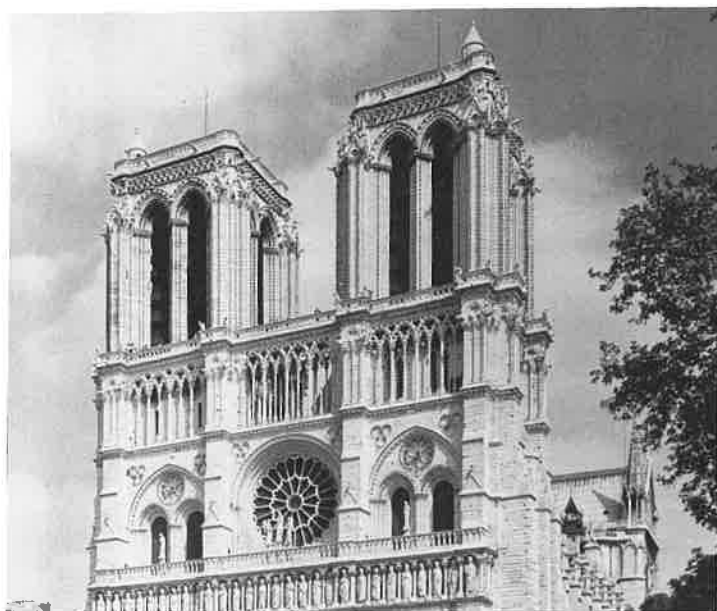
(4)インド学のより一層と発展と、印・英両国の永遠の友好。

このうちで特にインド・イギリス両国民をアーリア人という名のもとに一括して呼んでいることは注目をひきます。インドの古典語であるサンスクリット語、さらには古いヴェーダ語が実は英語、仏語等の現代のヨーロッパ諸語の原型であるラテン語、ギリシャ語と親族関係にあ



ることは、今では周知の事実ですが、このことが発見された当初はヨーロッパ世界の人々には大きな衝撃であったと思われます。植民地を支配する側と支配される側との先祖が実は同じ言語を共有していたわけですから、彼らにとってみれば、やはり、これは目もさめるような出来事であったのでしよう。一方インド国民にとっても、現在は支配階層である肌の白い彼らも起源を遡れば同じ先祖、少なくとも同じ言語を共有していた民族であったという事実は、政治的にはともかく、精神的には彼らと平等であるという自意識を生じさせるのに十分なことであったのです。この精神的・文化的意味での両国民の対等関係が、このアーリア人という言葉のなかに如実に表われていると考えられます。

参考までに、このサンスクリットの原文とその英訳を紹介いたしますが、当時のインド国民のこのインステイチュート創設にかけた情熱を



汲ひし頂けおほき幸ひすべし。

śaleyam prācyā-śāstrāṇām jñanottejana-  
tatparaiḥ,  
paropakariḥ, sadbhiḥ sthāpitār-  
yopayogini. (1)

vivardhatām.(4)

この銅板の下に、真鍮板に次のような英訳が施  
せられて居る。

ālbar t - e d var d - itikyāto yuvarājo ma-  
hāmanāh,  
rājārāješvari-putras tat-pratiṣṭhām vyadhāt  
svayam. (2)  
anḅkarāmanka-candre 'bde vaisākhasyāsite  
dale,  
daśamyām budhavāre ca vāstu-vidhir abhūd  
iha. (3)

This building,dedicated to Eastern science,  
was founded  
for the use of Āryans(Indians & Englishmen)  
by excellent  
and benevolent men desirous of encouraging  
knowledge. (1) \*

iśānukampayā nityam ārya - vidyā ma-  
hiyatām,  
āryāvartāṅgulabhūmyoś ca mitho matri

The High - minded Heir - Apparent,named  
Albert Edward,  
son of the Empress of India,himself perfor-  
med the act of  
inauguration. (2) \*

The ceremony of laying the memorial stone  
took place  
on Wednesday, the 10th lunar day of the dark  
half of  
the month of Vaiśākha, in the Samvat year  
1939.  
(=Wednesday, May 2, 1883)(3) \*

By the favour of God may the learning and  
literature  
of India be ever held in honour; and the  
mutual  
friendship of India and England constantly  
increase.(4) \*

(三十一)

